あぱっさ

vol. 12

ワウラ語：土地の精霊

静まり返った宮島大聖院の夜、ラオーニからアマゾンの話しを聞きたい。数年前に漠然とした発想を広島支部の代表、松岡敏子と語ったところから、今回の3度目ラオーニ来日計画が動き出しました。広島、長崎、静岡、新潟の支部メンバーそして本部のスタッフが本気で協力、沢山の方たちの愛とやる気の覚悟で、17日間を乗り切ることができ至福の喜びと安堵感で今は満ち足りています。90歳をとうに越したであろうカヤポ族長老ラオーニ、そして今回は彼の2人の孫、ブライリとベポーも来日。次世代に己の生き様を見せ、何を伝えるかも十分に語ったラオーニ。彼の人生は自然の法則に従うために、それに反する者たちとの戦いの日々でした。戦士であり聖者でもあり、その素顔は厳しさの中にも無邪気さとユーモアを備え、大きな光のような存在です。

1989年に私はラオーニと初めて会い、アマゾン支援を始めようと決めて25年が経ちました。アマゾンの現状は開発優先の論理で進み、巨大ダム建設着工、大豆畑の拡大、地下資源の乱掘等、決して改善の方向ではありませんが、ラオーニをはじめとしたインディオたちはどんな状況においても諦めず、正しき道を進んでいます。次世代の蓄えを食ることなく、物質文明の欲に惑わされず生きる事は文明社会において、それなりのしんどさもあるかもしれませんが、人の道から外れる事なく、己を律しアマゾン支援を地道に続けていくことを再認識する時間でした。

沢山の課題を私たちに残し、3人はジャングルへ帰って行きました。20歳のベポーの「おじいさんの世代は伝統の黒いボディーペインティングとこん棒を振り暴力で、白人社会に挑んだけれど、僕たちは白人社会のシステムを学び紙とペンで戦う」との言葉に未来への広がりと、オルタナティブの道を期待できる希望を感じ、この3人を日本に招待した意義もあったと感じました。沢山の方たちのご協力があってこと実現できましたことを感謝し、お礼申し上げます。ありがとうございました。

（南　研子）

HOW TO HELP

＜年会費＞大人：¥5,000　18歳未満：¥3,000

- **郵便振替　00140-3-144187　熱帯森林保護団体**
  ＊通信欄に「会費」または「寄付」とご明記ください。
- **三井住友銀行　東京中央支店**
  (普) 7066247　熱帯森林保護団体
  ＊銀行からのお振込の方は、
  お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせ下さい。

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012　東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL : 03-5481-1912　FAX : 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com　www.rainforestjp.com

今回はラオーニ来日特集号です。
＊要で頑張ってくれた人たちからの熱きメッセージです。

あなたにとって大切なものはなにですか？　　RFJひろしま代表　松岡敏子

私たち広島での講演会では、参加者にそう問いかけてアマゾンへの想いを繋げてみたいと考えました。家族、友達、恋人、自分、生命、平和、自然などなど大切なものはたくさんあります。どれもこの地球に生きていればこそ！では母なる地球にとって私たち人間の存在は大切なものなのでしょうか？行き過ぎた生活は、地球環境をあまりにも急激に変えてしまっている。大聖院での夜の講演会で、ラオーニは言いました「私はこの地球の創造主に会ったことがあるが、「お前は頑張っているので死んだら私の隣に住まわせよう」と言われた。きっと私は、こんな大聖院のような立派な家を建てるのではないかと思っている。」と冗談とも本気ともつかぬ、やさしい顔で微笑んだ。ああ～ラオーニは本当に、地球のために頑張っているよね。アマゾンの森の伐採がこのまま続き“地球の肺”としての機能を果たさなくなって、インディオが森を去る時が来るとしたら、やはりラオーニが言うように、私たちの世界も終りがくるのかもしれない。でもラオーニを見ていると微塵も不安を感じさせないし、今できることを精一杯し、今を楽しんでいる。ラオーニはやはり今を生きる偉大な聖者だった。出会えたことに感謝をしたい。ラオーニ、ブライリ、ベッポ―遠くアマゾンからの風を・・メッセージを広島に届けてくれてありがとう。

私たちはここにいて共に在ります。もらった種は、みんなで大きく育てていきたいね。

最後になりましたが、広島での様々なイベントの開催ができましたのも、個人、団体、企業、参加者、ボランティア、多くの皆さまの多大なるご支援ご協力の賜物です。

スタッフ一同心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

「アマゾンとつながる」ということ　　RFJながさき代表　林陽子

「インディオたちをまた日本に呼ぶことになった」と聞いて、私は、嬉しくて初めて文通相手と会う時のようにドキドキしていました。

初めてインディオにお会いした時の緊張感は忘れることが出来ません。特に、長老ラオーニは、近くにいるとすごく安心感があり、でも、決して気安くはないという印象でした。講演会での彼らは真剣そのもので、本当にメッセンジャーなのだと感じました。彼ら３人が訴えていることは一貫してアマゾンの森を守りたいということ。特に印象に残ったのは、若干20歳のベポ青年が言った言葉です。

「日本人は色々なものを必要としているが、その全ては自分達では賄えない。だから、それがどこから来ているのかを知ってほしい。」と。

私は、研子さんの講演会で、初めてアマゾンの森が大規模な大豆畑に変わっているという事実を知りました。そして、今ここで私ができることを探した結果、長崎で大豆作りを始めようと「ながさき支部」を立ち上げました。とても小さな畑ですが、今回、実際にアマゾンの人に会い、直接彼らの言葉を聞いた事で、私達が大豆を作っている意味を更に強く実感出来たように思います。

彼らのメッセージを受け取り、それに対する自分達なりの答えを、何かしら行動として示していく。それが、アマゾンとつながるということなのかもしれないと改めて思いました。